

つくってみよう！ オリジナル地図

地図をつくるときの指導・助言について

奈良教育大学 教授 岩本 廣美

社会科の学習とくに小学校3・4学年の地域学習では、地図をつくる活動がしばしば行われます。近年はICT化が進んでいますが、児童が地図づくりを手作業で行うことには重要な意味があると思われまます。小学校段階では、体を動かしながら地図をつくることを通して、地図の基本を身につけることができるからです。

今回は、児童の地図づくりの活動の際にどのような指導・助言をすればよいか、市街地でひとつのテーマをもとに調べて地図に表現する事例をもとに述べまます。そのときに、ひとつの地図を、数人のグループでつくる場合と個別につくる場合のそれぞれについて、共通点や相違点などを考えてみまます。

地図づくりの手順

取り上げた事例（図1）は、児童が市街地内を歩き、横断歩道および「止まれ」の標示が道路上にはっきり書かれているかどうかを調査し、結果を地図に表したものです。内容は、小学校3・4学年社会科の安全にかかわる学習に位置づけられるものです。このような地図は、次の①～④の手順をふむことによってつくることができます。

①テーマを設定する。児童がテーマを設定した場合、指導者は、児童が自力で調べることができるかどうか、結果を地図に確実に表せるかどうか、について見きわめる必要があります。

②調べる対象や範囲を明確にする。事例では、調べる対象が横断歩道と「止まれ」の標示であり、児童が目で確認できます。また、調べる範囲は、45分（または45分×n）の授業時間内で調べられるように設定しなければなりません。調べる範囲の白地図の用意も必要です。市街地を調査する場合、白地図にはすべての道路と主要な目標物がかかっている必要があります。

③現地調査を行い、持ち歩く白地図に結果を記入する。このときに、写真撮影をしておくと、のちに再確認するときに役立ちまます。

④調査結果をまとめた地図をつくる。

以上の手順は、地図をグループにつくる場合、個別でつくる場合の双方に共通してまます。ただし、グループの場合と個別の場合とでは、④の地図をつくる段階の進め方がかなり異なりますので、以下に具体的に述べまます。

グループで地図をつくる場合

構成人数3～4人のグループでひとつの地図をつくる場合、地図のサイズはグループのどの児童も同時に見ることができるものでなければなりません。模造紙大（A0判の用紙）、または、その半分（A1判）が適当と思われまます。紙質はじょうぶな厚めのものがよいでしょう。しかし、現地調査で使う白地図のサイズはA4判かB5判が普通ですから、④の地図づくりの段階では、まず道路網だけを模造紙に書き出す必要があります。このときにど



図1 見えない! 横断歩道・止まれ
さいたま市立宮原小学校4年 小曾戸岳洋

うしてもゆがみが生じます。しかし、鉛筆で薄く下書きをするときに主要な道路から先に書くよう指導すれば、ゆがみは最小限にとどめることができます。

次に、調査時に白地図に記録した調査結果を模造紙に転記していきます。このときに起きやすいのが位置の転記ミスです。これを防ぐには、転記の前に、模造紙の道路網には目標物もところどころに書くように助言しておくことが有効です。図1では、公園、コンビニエンスストアなど児童が把握しやすい目標が書かれています。もうひとつ重要なことは、児童が凡例を共通理解したうえで転記するよう指導することです。凡例が確実であれば、分担範囲を決めて各児童が同時並行で作業を進めることも可能になります。

* 作成者の学年は、作成時のものです。

個別に地図をつくる場合

児童が1人で1枚の地図をつくる場合の地図のサイズは、教室で児童が使う机の大きさや地図をつくったのちに教室の壁面に掲示することなどを考慮し、B4判かA3判でいどが適当と思われます。この場合も、紙質はじょうぶな厚めのものがよいでしょう。

個別に地図をつくる場合の道路網の書き方はふた通りあります。ひとつは、調査時に用いた白地図を指導者が薄めに拡大コピーし、その線を濃くなぞるよう指導して道路網を完成させる方法です。この方法ではどの児童も比較的短時間に正確な道路網を再現することができるという利点があります。もうひとつの方法は、模造紙のとくと同じように、主要道路

路から先に鉛筆で薄く下書きをしたうえで道路網全体を書くものです。

個別につくる場合、凡例は、ほかの児童とテーマが同じ場合でも、個々に決めさせてよいでしょう。また、地図にイラストや説明を加えるなどのくふうも自由に考えるよう指導してよいでしょう。ただし、個別に地図をつくる場合は、クラスの中で作業スピードに個人差がかなり出ることを、指導者は計画段階で考慮に入れる必要があります。

本稿で示した地図をつくる手順や指導・助言の想定はあくまでもひとつのモデルです。実際に地図づくりの指導を行う場合には、臨機応変に対応・くふうをはかっただければ幸甚です。